

〈論文〉

## 吉原遊廓地業についての基礎的研究

小柳美樹

### 要約

明暦三年(1657年)、吉原遊廓は奥浅草(現在の台東区千束)で新たに誕生する。この地は洪水から江戸城下を守る堤防(日本堤)が築かれる一方で、寺社地や墓地、刑場、ゴミ集積場などが配置された場所であり、江戸城下町の再開発が進む中で遊廓が組み込まれたことが確認できる。発掘調査による地層堆積状況を確認すると、吉原遊廓は後背地砂州上の微高地に立地していることが確認できる。わずか4ヵ月足らずの短期間での造成地業、遊廓完成の要因のひとつとして地理条件を加えることができる。

### キーワード

江戸 台東区 吉原遊廓 地業

日本の江戸時代における遊廓の代表と言えば江戸の「吉原」であろう。「吉原」遊廓はもともと日本橋に所在していたが、明暦三年(1657年)に江戸城下町の発展に伴う都市再計画の中で新たに場所が設定され、奥浅草の「新吉原」遊廓へと移動する。新たな場所は地業(土地整備)が短期間のうちに行われ遊廓が造営された。現在の地番では、東京都台東区千束三・四丁目に該当する。本稿では「新吉原」を「吉原」と表記しながらこの地業について文献史料と考古学研究による知見によって検証を進める。

### 1. 吉原遊廓の地勢(図1)

吉原遊廓は東京都東部のいわゆる「下町」と呼ばれる地域にあり、隅田川西岸の浅草北部に位置する。地理学的には「東京低地」と呼ばれ、武蔵野台地と下総台地に挟まれた低地上にある<sup>1)</sup>。この東京低地は関東北部に水源をもつ隅田川・中川・江戸川・荒川が集束して流れ込む場所であり、幾多の甚大な水害が発生したため、近現代においてその河川流路が大きく改修された。この氾濫原による沼沢地、低湿地が形成された下町地域に吉原遊廓が位置する。

この地域は縄文時代前期までは海進作用によって水没していたが、縄文時代中期以降には海退作用によって干潟が形成され、かつ利根川・荒川による土砂の流入によって、次第に陸地化されていく<sup>2・3)</sup>。現：隅田川(旧・入間川)西岸部における台東区・荒川区の遺跡分布を確認すると、武蔵野台地縁辺崖部

こやなぎ よしき：淑徳大学 人文学部 兼任講師

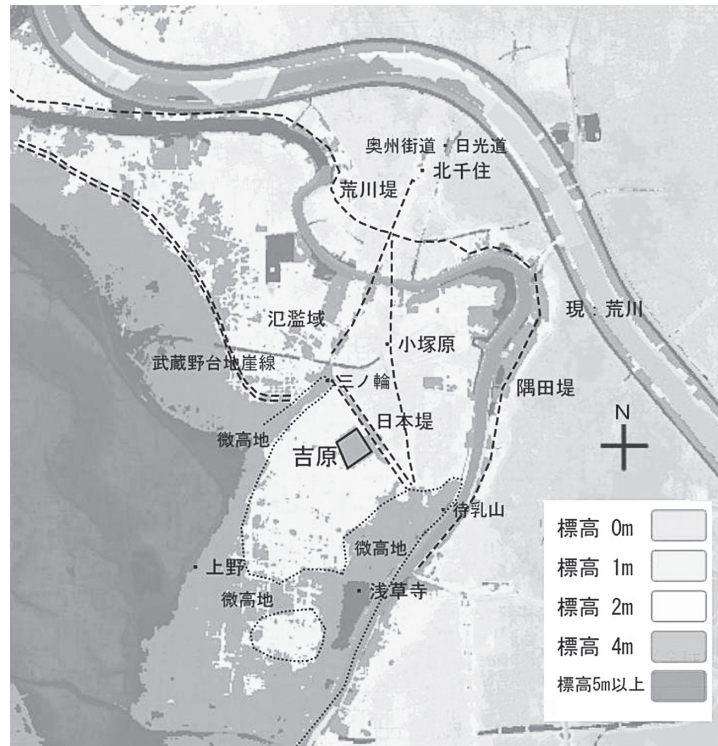


図1 吉原遊廓周辺の地勢図

に縄文時代から弥生時代にかけての貝塚遺跡・貝散布地が点在していることが確認できる。古墳時代においても古墳の立地状況から周辺よりも微高地を形成している場所に所在し、またその周囲に集落が存在していることが推察できる。それらは低地帯においても、湿度が緩和される島状に浮かぶ微高地に拠点を求めたのであろう。その後の中近世においては、江戸氏、太田道灌、後北条氏の領地支配が行われるが、それぞれの支配者たちによって開発事業に伴う水利整備および水害対策が積極的に進められることとなる<sup>4)</sup>。特に旧：入間川の氾濫による洪水対策として川沿いには天正二年(1574年)の熊谷堤および墨田堤の造営などの荒川の治水対策が進められた。また寛永六年(1629年)には、伊奈氏による熊谷市久下において河川流路変更工事が行われ、下流の和田吉野川、市野川、入間川へと荒川が流れる込むこととなる。そして明治43年(1910年)の関東大水害を契機に大水利事業となる「荒川放水路」は大正二年(1913年)に着工され、昭和五年(1930年)に完成し、後の昭和三九年(1964年)には「荒川」と名称が変更されるに到る。それに伴い、もともとの荒川が「隅田川」と改称された。現在でも「元荒川」の旧名称は、「荒川の流れない荒川区」のように地名としてひとつひとつの記憶に残ることとなる<sup>5)</sup>。

2 徳川秀忠が元和六年(1620年)に80余州の大名に命じて築かれた日本堤(山谷堀)は浅草待乳山から聖元町、三ノ輪を結んだ延長860m(480間)、高さ3m(10尺)、上幅7.2m(4間)を測る。これにより、隅田川(当時の荒川)の西岸における防水堤が完成し、かつ浅草方面から奥州道・日光街道へと通じる幹線道路のひとつとなる。山谷堀以前にも別の堤があったといわれ、堤が二本になったことから「二本堤」、後に事業を記念して「日本堤」と呼ばれるようになった<sup>6)</sup>。中世以降、江戸の街を水害から守るための肝心要の場所であったことが推察できる。

自然地勢と防水堤の位置関係を俯瞰すれば、西側の武蔵野丘陵の崖線(上野～王子～赤羽のJR線西側)および上野～根岸～三ノ輪(通称・昭和通り。現国道四号線およびその北側の旧奥州街道)に弥生時代・古墳時代頃に形成された砂州による微丘地状の高まりは荒川堤へと連なり、U字状の遊水池を形成していることがわかる。この地域内では必然的に洪水が発生するため荒川区汐入・北区岩淵などではその

対策として水屋家屋の建造や非難船の備えを講じ、現在もその面影を残す。

日本堤は東側の隅田川からの防水堤となるが、もし三ノ輪付近で決壊し洪水が流れ込んだとしても日本堤と上野～浅草(通称・上野通り)に形成された砂州(微丘地)によって囲まれた地帯が遊水池の機能をもつラグーン化した低地帯であることから<sup>7)</sup>、上述した北側の遊水池と合わせて8の字形の遊水池を呈し、水害に備えたことがわかる。この低地帯の東縁辺部に吉原が位置し、絵地図をみると江戸期には多くが沼沢地(千束池など)や溜め池が存在し、水田経営が行われていたことが確認できる。西の市で有名な鷲神社は吉原の西北部に近接するが「浅草田圃」という古地名が現在でも通用している。

吉原遊廓の元々の地盤は、東京低地における海進海退を経て河川堆積に由来する粘土層から砂層堆積へと変遷する基本堆積が確認できる<sup>8)</sup>。地層学的に言えば、地表下4～5m程の浅部地下地質は「有楽町層」と呼ばれる地層であり、完新世に中川・荒川による河成堆積物と奥東京湾における海退期の河口におけるデルタの堆積物によって形成されたものである<sup>9)</sup>。陸地化したとはいえ、基本的に沼沢地や湿地であるために長く水田として土地利用が行われており、居住地であったとしても住む民衆階層を選ぶ場所であったと考えられる。明治期に入ってようやく盛土造成がさかんに行われ、新東京の誕生に伴う宅地化が進められた地域であることも各時代の地図を比較することで確認できる<sup>10)</sup>。

吉原遊廓地業に関する具体的な土木工事の内容が記載された古文書が確認できないこと、また吉原遊廓内においての埋蔵文化財発掘調査報告書が現在のところ刊行されていないため、周囲の発掘調査報告事例などを参照しながら吉原遊廓地業に関わる検証を進めることとする。

吉原遊廓周辺で公表されている発掘調査報告書において記載された基本層序によって各地点における近世以前の土地状況の様子および近世以後の盛土の状況が確認できる<sup>11～17)</sup>。(図2・表1)

まず、自然地形から分けると遺跡の分布は、1)自然貝層を形成する「海岸沿い」、2)後背地となる砂州上、3)水域(沼沢地・湿地)内に所在していることが分類できる。

それらは地層中の貝殻・牡蠣殻の有無、砂礫層の有無、砂層の有無など土壌包含物・構成土壌から判断することができる。竜泉寺遺跡では、第3層で自然堆積(砂礫層)が確認できる<sup>18)</sup>。芝崎町三丁目遺跡(西浅草3丁目28)では第7層で牡蠣殻層が確認でき、その上面から盛土されている<sup>19)</sup>。江戸期は第3・4層が相当するとみられている。芝崎町二丁目遺跡では第6層で牡蠣殻層が検出されて、第3・4層を近世盛土層としている<sup>20)</sup>。入谷遺跡(下谷2丁目2番)では、第5層以下に砂層・礫層が検出され、第2～4層を近現代～近世の盛土層と考えられている<sup>21)</sup>。浅草寺病院遺跡では第6層が砂層であり、第5層に古代から中世、第2層を近世と考えている<sup>22)</sup>。浅草寺西遺跡では第8層がシルト層、第9層が砂質層としており、その上層もシルト層としているが人工堆積層と考えられている<sup>23)</sup>。浅草寺日本堤消防署二天門詰所遺跡では第4層が砂礫層、第3層が貝殻を含む砂層であり、第2層以上が人工堆積層と考えられている<sup>24)</sup>。

現地表面の標高と自然堆積層上面との厚さ(つまり現在までの人工堆積の厚さ)をみると、入谷遺跡2.6m、竜泉寺遺跡1.8m、芝崎三丁目遺跡1.7m、芝崎二丁目遺跡2.3m、浅草西遺跡は不明(報告書に標高記載が無い)、浅草病院遺跡1.8m、浅草寺日本堤消防署二天門詰所遺跡1.05mを測る<sup>25～31)</sup>。つまり、この標高数値が自然層上面の高度であり、それより上層が中世から現在に到るまでの盛土された地業層であることが確認できる。その数値を改めて確認すると、浅草寺遺跡はもともとの自然地形(地山)の標高が1mと高く、そこには貝殻層を有しないことから中世以前にすでに陸地化されていた砂州上の微高地であったことが改めて確認できる。また、貝殻を有する自然堆積がみられる芝崎三丁目・二丁目遺跡、竜泉寺遺跡では自然地形の標高が低いために、近世以降(多くは江戸晩期から明治初頭とみられる)の盛土が1.8m～2.6mと砂州上遺跡よりも厚く盛土されていることが確認できる<sup>32～35)</sup>。一般的に江戸時代の文化層(盛土層)は2～4mと言われているが<sup>36)</sup>、本稿の各地域が江戸城下郊外にあたり、小



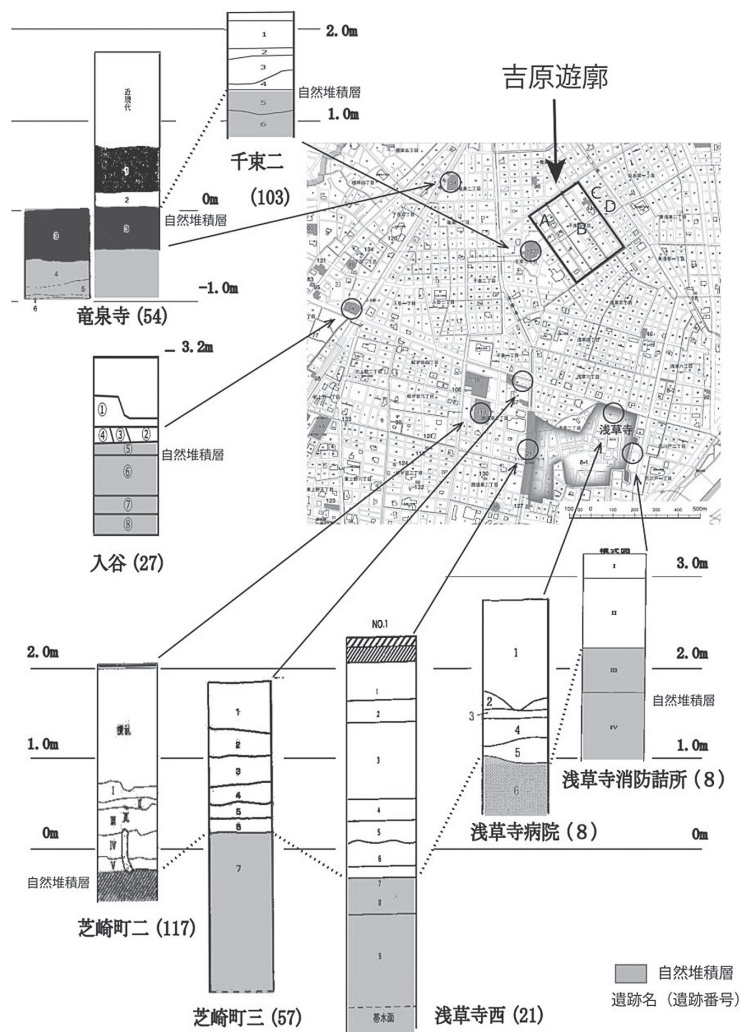


図2 吉原遊廓周辺の発掘調査地点基本地層一覧(図)

さな町屋と農作地が混在していることを考えると、全てが居住地のための盛土ではなく耕作用の客土であった可能性もあり、厚さも比較的に薄い数値となったと考える。

こうした地理状況のもとで吉原遊廓は平たく四角い島のように浮かんだ景観を呈することとなった。現在の国土地理院地図を1m毎に色分けしても明確に判別できるほどである(図1)<sup>37)</sup>。

4

## 2. 近世における江戸城下町整備と吉原遊廓地業

吉原遊廓地業に関する経緯および人文地理的背景について確認する。

徳川幕府の将軍、家康・秀忠・家光の三代にわたり、諸藩に命じて石垣・堀の掘削、土地整備が「天下普請」として進められた。幕府への忠誠心を普請によって示すことによって、江戸城およびその城下町における発展の基礎を造ったと言える。そのひとつに前述した日本堤の造成事業を挙げることができる<sup>38)</sup>。

江戸幕府開府とともにつくられた旧吉原遊廓は、そうした江戸城下町の発展とともに、街中から郊外へと移される計画が進められた<sup>39・40)</sup>。徳川家光時代の寛永年間(1624～1625年頃)において、江戸の街は江戸城外堀によって内外の境となっており、街の中心にほど近い位置となり風紀上好ましくないという流れから旧吉原を外堀外へと移転計画が企てられることとなる。成長し続ける江戸八百八町を

表1 吉原遊廓周辺の発掘調査地点基本地層一覧(表) および盛土厚度

遺跡名	千束町 二丁目	竜泉寺	入谷	芝崎町 2丁目	芝崎町 3丁目	浅草寺西	浅草寺病院	浅草寺 日本堤消防
遺跡番号	103	54	27	117	57	21	8	8
地層	表土	攪乱層		攪乱層				
	①人工堆積	①人工 (シルト層)	①表土	I 人工 (近代以降)	①表土	①人工 (近代)	①人工 (現代)	I 人工 (現代)
	②人工堆積	②人工 (砂質シルト層)	②人工 (近現代)	II 人工 (シルト層)	②人工 (近代)	②人工 (シルト層)	②人工 (近世)	II 人工 (暗灰色)
	③人工堆積	③自然 (砂礫層)	③人工 (近世)	III 人工 (近世地業層)	③人工 (江戸)	③人工 (シルト層)	③人工	III 自然 (貝殻・砂層)
↑人工堆積	④人工堆積	④自然 (小礫・貝殻)	④人工 (近世)	IV 人工 (近世整地層)	④人工 (江戸)	④人工 (焼土層)	④人工	IV 自然 (砂礫層)
↓自然堆積	⑤自然堆積	⑤自然 (砂層)	⑤自然 (砂層)	V 人工 (粘土層・ 木質遺物多)	⑤人工 (盛土)	⑤人工 (シルト層)	⑤人工 (古代~中世)	
	⑥自然堆積 (牡蠣殻)	⑥自然 (シルト層)	⑥自然 (砂層)	VI 自然 (牡蠣殻)	⑥人工 (盛土)	⑥人工 (シルト層)	⑥自然 (砂層)	
	⑦自然堆積 (貝層)		⑦自然 (礫層)		⑦自然 (牡蠣殻)	⑦人工 (木質遺物多)		
			⑧自然 (砂層)			⑧自然 (シルト層)		
						⑨自然 (砂層)		
現標高 (m)	2.4	1.8	3.1	2	1.9	?	2.8	3.25
地山標高 (m)	1.3	0	-0.5	-0.3	-0.2	?	1	2.2
盛土の厚さ (m)	1.1	1.8	2.6	2.3	1.7	?	1.8	1.05
旧地形	微高地	ラグーン	ラグーン	ラグーン	ラグーン	?	微高地	微高地

考慮すれば、より郊外の地に遊廓を置くことが盤石な策であったのだろう。移動候補地として、本所と浅草田圃(千束)が挙げられることとなるが、本所には当時はまだ隅田川に橋が架けられておらず、交通の便が不便であることから、浅草田圃が選定されたというのが通説となっている<sup>41)</sup>。江戸城下町の配置を整理すれば、郊外には寺社地、ゴミ集積地、墓地、刑場を置き、北は上野・浅草~新鳥越・清川~小塚原・南千住一帯を占める。本来の奥州街道・日光道中の路線が通じていた場所であるが、その整備とともに実際に機能した路線は変更される。南では品川南部一帯にもそうした「都市機能」の棲み分け配置を確認することができる。郊外に遊廓、将来的に歌舞伎場が置かれ歓楽街化することも日常生活とは距離を置いた遊里空間化することは、自然な成り行きであったと考えられる。すでに大集団墓地、小塚原刑場が配置されていた江戸北郊外では、吉原遊廓の移転場所を日本堤西側の低湿地帯に定め、三ノ輪から浅草に連なる微高地状の砂州上に地業整備を行うことが地業推進の上でも妥当であったと考えられる。

前節で述べた日本堤は浅草と三ノ輪を結ぶ交通路でありかつ重要な防水堤の機能を有していた。堤の方向は北西-南東方向に伸びる。吉原遊廓は日本堤と直交するように主軸線が設定されているため、町割りはその南北線軸上には合わない配置となる。「客が北枕にならないため」に町割りを南北軸からずらしたという説は粋な口実として後に創りあげられたものであろう。

果たして、吉原遊廓は江戸城下町北郊外の俗世界のひとつを占めたのである(図1)。

### 3. 新吉原移転の経緯

文献史料などから新吉原への移転過程を確認する。その多くは『中央区誌』、『台東区史』、『新吉原史考』に詳しい<sup>42~44)</sup>。

明暦二年(1656年)、元吉原から新吉原への移転が江戸町奉行石谷将監によって命じられた。元吉原の各遊廓店舗には新吉原への移転条件が提示された。条件は次の通りである<sup>45)</sup>。一、元地より5割増の面積を与える。二×二町から二×三町となる。二、夜間営業の許可。三、風呂屋敷の取り潰し(約200軒)。四、祭礼や出火時の消火活動などの町役御免と免除。五、引越料(立ち退き保証料)一万五千兩の支給(11月28日支給)。こうした移転計画が進められていく中で、明暦三年(1657年)1月18日に明暦大火が発生する。江戸城下の6割が消失し、数万人が死亡した。この復興は江戸城下全体の都市計画の再編となる。吉原移転事業計画は大火以前に発起しているが、明暦の大火による復興事業は江戸全体に及ぶものであり、新吉原遊廓建造も進行にさらに拍車がかかったであろう。

地業整備を前に、明暦三年(1657年)4月16日に北町奉行石谷将監貞清、南町奉行神尾備前守元勝、勘定奉行曾根源左衛門が立ち会って現地視察が行われた。縄張りが行われ、吉原遊廓の場所が確定することとなる<sup>46)</sup>。

その後、直ちに地業整備が開始された。この地業整備には知多出身者が多く関与したという考察がある<sup>47)</sup>。知多出身の土御門家が総監督的な役割を担い、現場監督が同じく知多出身である黒鍬衆により六組150人近い人員および非人頭車善七配下の非人3000人が工事に投じられたという。後に車善七たちは、吉原遊廓南西隅外に900余坪の土地を居住地として拝領し、吉原遊廓内のゴミ、屎尿処理などの事業を担っている。多くの絵地図〔江戸切り絵図、江戸名所図会、慶応改正御江戸大絵図(1867年製)〕に「非人小屋」「溜」などの表記が確認できるのがその拠点である。

地業整備は8月上旬には完成したことも複数の文書から確認でき、8月14日には新吉原が創業したことがわかる<sup>48)</sup>。地業工期がほんの3ヶ月弱という短期間で、地業が整い、多くの店舗が建造されたこととなる。急ごしらえながら立派な遊廓が建造されたのである。

一方では、元吉原が焼失した後の6月9日には、千住・三ノ輪地域において「仮宅」営業が認められたことにより、遊女2000人、禿900人が再集結して人材的な準備も整っていたことも確認できる。なお、吉原での大火災の発生は多く、22回が挙げられるが、そのうち19回が全焼している<sup>49)</sup>。火災一周辺での仮宅営業―復興―火災を繰り返すこととなるが、度重なる復興地業によって吉原の地盤が高くなっていくことも現標高の周囲との比較から認めることができる。こうした事象が吉原地内での発掘調査における地層確認でさらに検証されることを期待するところである。

### 4. 吉原遊廓の地盤

6

吉原遊廓における近世以前の自然地形を考えると、千束から元浅草・鳥越・浅草橋とつながり形成された微丘地は、縄文海退期に中川や荒川の三角州が発達して海岸線が徐々に南進する過程で、湾岸流によって形成された海岸の砂州であると考えられている<sup>50)</sup>、日本堤ラインがもともとの隅田川(旧:荒川)による自然堤防的な微高地を形成し、その西側に広がる後背湿地においても吉原遊廓は他の場所よりも比較的高い場所であったことが選地された大きな要因と考えられる。

吉原遊廓地内(遺跡名無し・遺跡番号115、千束4-33・40)において発掘調査が過去に行われているが、発掘報告書が刊行されておらず、資料は未発表のままである<sup>51)</sup>。そのため公表されている吉原遊廓に隣接した位置となる、発掘報告書により資料が公表されている浅草千束二丁目遺跡(遺跡番号103、



千束3-20;旧・吉原病院地内;現・区立台東病院内)の基本層序を確認しておきたい(図2・表1)<sup>52)</sup>。第5層以下が自然堆積層と考えており、第6層は牡蠣殻層、第7層は牡蠣殻の無い貝層である。人工堆積層(つまり近世、近現代の盛土層、すなわち人工堆積層)は第4層(標高-0.25cm前後)以上となる。報告書での現表土標高が2.4mを測るため、人工盛土は1.1mの厚さと認識できる。吉原遊廓の立地が砂州上であることを考えれば、浅草千束二丁目遺跡である吉原病院(現:区立台東病院)は吉原遊廓外に所在するものの、第1節で述べた吉原周辺の地勢および地盤状況と比較してみても、周辺域よりも微高地上である場所に立地していることは明確である。以上のことを踏まえると、吉原遊廓を上野-浅草-三ノ輪の三角地域の中でも造成地が行い易い場所であることが明瞭である。

吉原遊廓内は周囲よりも自然地形が高い場所であり、日本堤(もともとの自然堤防帯)へと続くこととなる。国土地理院のデータでは吉原の中心地(台東区千束四丁目;仲の町通りと揚屋町の交差点)の現標高が3.0mを測り、吉原病院(現;区立台東病院)の現標高1.6mとの差が1.4mを測る。日本堤との距離200m程での勾配度は0.7%と大きい<sup>53)</sup>。浅草千束二丁目遺跡の地山(自然堆積層上面)と吉原遊廓の地山の高さがほぼ同じだとすれば、吉原遊廓は現在に到るまでに約3mの厚さの盛土堆積であることが判る。吉原遊廓内においては、遊廓開設以来の22回に及ぶ大火事災害、関東大震災(1923年)、東京大空襲(1945年)などの壊滅的な災害や戦災を受けているが、そのたび毎の復興事業において、盛土、削平などによる復興地業工事が繰り返されたことにより、単純に盛土のみで造成されているわけではないと推察できる。吉原遊廓内の造成工事時における堆積状況を遠望ではあるが目視できた際に、数層の焼土層を確認している(図2-B地点、図3左下)。しかしながらその焼土層が22回におよぶ火災や震災・戦災のどれに相当するかは目視だけでは判断することができない。詳細な事象を確認するには、地層確認だけでも考古学的な発掘調査が必要であろう。

盛土による地盤整備には、その崩壊を防ぐために周囲を石垣積み、地盤固めの杭打ち(ロウソク事業、ソロバン事業と呼称される工法)が往々にして行われたと考えられる。こうした検証もやはり発掘調査や再開発による掘削時に確認することが肝要である。現在の吉原地内を踏査すると石積み遺構が確認できるのは、ごくほんの限られた地点である。江戸一町内において石積みが露頭しているが、目視した



図3 吉原遊廓内現況写真(筆者撮影)

- 左上) グライ化して黒色を呈する土壌
- 左下) 焼土の混じる近現代層(確認できる地層の線を図版上加筆)
- 右上) 「お歯黒どぶ」に接した「石積み」および盛土の厚さが確認できる
- 右下) 「お歯黒どぶ」に接した公園入り口(盛土の厚さが確認できる)

限りでは下部石積みと上部石積みの石材が異なり、積み方も粗雑であるため、造営当初からの護岸擁壁であるとは認め難い(図2-D地点、図3右上)。ただし、溝は埋没しているが盛土の厚さを実感できる地点が数カ所で確認できる(図2-D、図3右下)。

## 5. 吉原遊廓地業の規模

吉原遊廓は京間尺を使い、奥行き百三十五間(約265.95m)、幅百八十間(約354.6m)、面積二万八千五百坪(約94305.8m<sup>2</sup>)を測る<sup>54)</sup>。元吉原の五カ町から新たに揚屋町を加え六カ町となった。廓周囲には溝が巡らされる。絵図には「おおどぶ」と記されるが、「お歯黒どぶ」と通称され一般化している。遊女がお歯黒を捨てたため、その成分が黒色を呈したためといわれるが、元々の地勢が湿地帯のグライ土壌(排水不良な土壌)なので、それを反映した黒色土、暗褐色土が溝の壁に表出していたと考えられる。実際に吉原遊廓内の工事現場などの土壌色を確認すると表土面においても黒色土を呈していることが多見できる(図2-A地点、図3左上)。

溝は当初は五間幅(約9m)を測り、江戸時代末期、明治時代初期には二間幅(約3.6m)、明治36年には三尺幅(約1.2m)に狭小されている<sup>55)</sup>。溝の必要性の変化、大門以外の交通路の確保要求などの要因が考えられる。当初の五間幅の必要性はまず吉原遊廓の地業における盛土用土の確保と考えて良いであろう。遊廓周囲の溝掘削によって用土をまず確保したことが推察できる。

廓外周の総延長は630間(1234m)であり、溝幅を5間(9m)とした場合の面積は約11106m<sup>2</sup>となる。吉原遊廓の面積約93366m<sup>2</sup>に対して、溝掘削による排土で賄おうとすれば、深さ2mの溝を掘削したとしてその土量(22212立方メートル)から換算すると、廓内への盛土の厚さは0.238m=約25cmとなる。土の膨張と硬度を増すために圧縮などによる土容量の変化も勘案せねばならないだろうが、前節までにみてきたように吉原周辺の盛土状況が均べて1mを優に超えている。仮に周壕掘削の排土だけで盛土厚1mを賄おうとすれば、周壕の深さは平均して最低でも8.4mが必要となり、盛土厚2mを賄うのであれば周壕の深さを17mも求めることとなる。結論から言えば、周壕からの排土だけでは賄えない。また、グライ化した土壌だけでは地盤を堅固にすることは適切ではないので、ほかに「ガラ土」(砂礫や瓦礫を含んだ土)が必要であったと考えて良い。明暦の大火によって生じた瓦礫が、こうした地業整備に使われたという論もみられる<sup>56)</sup>。江戸城下全域で復興事業・再整備が行われていた中でどれだけ優先的に確保できたのかは定かではない。そのため、吉原遊廓に近い新鳥越地区が明暦大火時の瓦礫の集積場であったとも言われるが、そこから盛土の調達を行った可能性については、肯定も否定するにも十分な資料は今のところ存在していない。しかしながら、半年にも満たない短期間での地業造営にはそれまでの江戸城および江戸城下町造営の経験が活かされ、町奉行所が率先して有効かつ効率的に地業が進められて完成したことは間違いない。

8

## 6. 上下水道の整備

ライフラインの機能として「上下水道」の整備が吉原遊廓内ではどのように行われたのかを地業の一環として確認しておきたい。文献史料からは明暦三年の完成当初から整備されていたことは確認できない。吉原遊廓を描いた浮世絵風景画には本通りである仲の町通り奥に「水戸尻」と呼ばれる常夜灯(秋葉常灯明)と井戸の存在が示されている<sup>57)</sup>。『吉原大全』『新吉原細見記』『北里見聞録』には元禄宝永の頃に紀伊国屋文左衛門が揚屋の尾張屋清十郎邸内に井戸を掘り、そこから水戸尻まで呼戸樋で



導水し、上水施設として利用したという資料が残る。「水戸尻」は元来「水道尻」に意を發するという説が残る。また元吉原の資料にも「水戸尻」が存在しているので、防火用水場などの旧地から引き継がれた廓構造である可能性も否定できず、さらに検討する必要を有する。少なくとも18世紀初頭には利用されていた施設であるが、この水道施設で人口1万人を超えた遊廓内を賄えるとは到底考えられない。各町内、妓楼内で井戸が設置されていたかについても埋蔵文化財発掘調査などからの検証が必要である。

往々にして水売り屋などが廓外から生活用水・飲料水を搬入していたとみられる。文献史料には吉原遊廓への上水供給が廓外東方にある橋場・清川・鳥越地域の井戸から汲み上げて運んだという記事もみられる。例えば、宮川政運『俗事百工起源』には、「橋場総泉寺のこなたなる、玉稻荷の社内に有る井戸を汲み、又北鳥道西側なる德音院門前の大井戸を汲みたりとかや」と記載があり、「仲の町より小路々々の通り路は常に湿り勝ち」と水運びによってこぼれた水が路面を濡らしている描写が残る<sup>58)</sup>。

一方、下水道施設およびゴミの処理についても、下水道施設の存在が認められない。住人たちが少量と考える排水は廓周囲の溝(おおどぶ・お歯黒みぞ)に排水されていたと考えられるが、大量の尿尿や残滓類などは早朝のひと目が見つからない時間帯に搬出されたと考えべきである。通常時に通過ができる吉原大門を使わずに、廓外周の各地点において戸板などを使った仮橋・吊り橋が架けられて不浄の物が搬出されたようである。廓内で死亡した遊女なども同様の措置が取られた<sup>59)</sup>。吉原大門の反対側に裏門が設置されて、西の市の日には開放し民衆が通り抜けできるような年中行事となった時期についても未詳のままであるが、遊廓内への上水道の整備を探る上では重要な検討項目である。

## 結びとして

吉原遊廓の地業について、地理学的視点、文献史料、考古学的調査を合わせながら考察を進めた。吉原遊廓地業は、各町奉行所が協同して地業を監督し、江戸城下町の発展、再開発計画の中でも重要な課題として行われ、短期間で完成している。町奉行としても最優先的の事案であったのであろう。その「遊廓」という街の性格から江戸城下町郊外の大集団墓地や刑場と連なる俗の場所が選ばれる。そうした従来の文献史料からのアプローチとは別に、本稿においては考古学研究による地層学の検証から、江戸初期の都市開発を免れた広く場所が確保できる上に、地業・造成・普請がほかの場所よりも進行し易い、奥浅草の後背湿地の砂州上を意識的に選択していることが確認できた意義は大きい。今後の課題としては、人工島のように築かれた吉原遊廓についての造成工法や資材の調達経緯等について依然と詳細が不明のままである。既存の考古学資料からどのように解明していくかさらに検討していきたい。

近年では江戸城およびその城下町の研究が考古学的にも文献史的にももちろんのこと、都市工学などの様々な研究分野によって学際的に研究が進められている。そうした中で、城下町に隣接する外周地域の役割、宿場町を結ぶ「線」となる場所の歴史についても、改めて研究の再構築を行う時期を迎えているであろう。明治期になり吉原遊廓周辺の水田や沼沢地が居住地に変わり町屋を形成し、新しい近代「東京の下町」が造りあげられていく歴史の解読も、考古学研究によって積極的に進められる機運を抱いた次第である。

## 引用文献・註

- 1) 貝塚爽平『東京の自然史』(増補第2版)、紀伊国屋書店、1987。
- 2) 貝塚爽平 前掲書1。
- 3) 大矢雅彦・高山一・久保純子・応用地質(株)『荒川流域地形分類図および説明書』、建設省荒川上流工事事務所、1996。

- 4) 台東区史編纂専門委員会『台東区史』通史編Ⅰ(下巻), 2002.
- 5) 荒川下流工事事務所七十五年史編集委員会『都市を往く・荒川下流』, 国交省荒川下流河川事務所発行, 1990.
- 6) 台東区史編纂専門委員会 前掲書4.
- 7) 菊地真「古地理復元の高分解能化と課題; 東京低地南西部における地形発達と土地利用変化の事例から」『神戸大学文学部紀要』44、109-127頁, 2017.
- 8) 荒川下流工事事務所七十五年史編集委員会 前掲書5.
- 9) 菊地真 前掲書7.
- 10) 台東区史編纂専門委員会 前掲書4.
- 11) 台東区文化財調査会『竜泉寺町遺跡』, 台東区埋蔵文化財発掘調査報告書20号, 2008.
- 12) 台東区文化財調査会『芝崎町三丁目遺跡 西浅草三丁目28番地地点』, 台東区埋蔵文化財発掘調査報告書51号、2010.
- 13) 藤和不動産株式会社ほか『芝崎町二丁目遺跡』, 台東区埋蔵文化財発掘調査報告書40号, 2009.
- 14) 台東区文化財調査会『入谷遺跡 下谷二丁目2番地地点』, 台東区埋蔵文化財発掘調査報告書16号, 2010.
- 15) 台東区文化財調査会『浅草寺遺跡 浅草寺病院地点』, 台東区埋蔵文化財発掘調査報告書13号, 2001.
- 16) 台東区文化財調査会『浅草寺西遺跡』, 台東区埋蔵文化財発掘調査報告書6号, 1999.
- 17) 台東区文化財調査会『浅草寺遺跡 日本堤消防署二天門出張所詰所地点』, 台東区埋蔵文化財発掘調査報告書29号、2005.
- 18) 台東区文化財調査会 前掲書11.
- 19) 台東区文化財調査会 前掲書12.
- 20) 台東区文化財調査会 前掲書13.
- 21) 台東区文化財調査会 前掲書14.
- 22) 台東区文化財調査会 前掲書15.
- 23) 台東区文化財調査会 前掲書16.
- 24) 台東区文化財調査会 前掲書17.
- 25) 台東区文化財調査会 前掲書14.
- 26) 台東区文化財調査会 前掲書11.
- 27) 台東区文化財調査会 前掲書12.
- 28) 台東区文化財調査会 前掲書13.
- 29) 台東区文化財調査会 前掲書16.
- 30) 台東区文化財調査会 前掲書15.
- 31) 台東区文化財調査会 前掲書17.
- 32) 台東区文化財調査会 前掲書15.
- 33) 台東区文化財調査会 前掲書12.
- 34) 台東区文化財調査会 前掲書13.
- 10 35) 台東区文化財調査会 前掲書11.
- 36) 例えば古泉弘『江戸を掘る—近世都市考古学への招待—』, 柏書房, 1983.
- 37) 国土地理院地図 2020.
- 38) 台東区史編纂専門委員会 前掲書4.
- 39) 東京都中央区役所『中央区史』上巻, 1958.
- 40) 台東区史編纂専門委員会 前掲書4.
- 41) 東京都台東区役所編『新吉原史考』, 台東区役所, 1960.
- 42) 東京都中央区役所 前掲書39.
- 43) 台東区史編纂専門委員会 前掲書4.

- 44) 東京都台東区役所編 前掲書 41.
- 45) 東京都中央区役所 前掲書 39.
- 46) 台東区史編纂専門委員会 前掲書 4.
- 47) 塩見鮮一郎『吉原という異界』, 河出書房新社, 2015.
- 48) 台東区史編纂専門委員会 前掲書 4.
- 49) 東京都台東区役所編 前掲書 41.
- 50) 菊地真 前掲書 7.
- 51) 台東区教育委員会編『台東区の遺跡地図』, 台東区教育委員会, 2017.
- 52) 台東区文化財調査会『浅草千束町二丁目遺跡 千束三丁目 20 番地地点』, 台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 33 号, 2007.
- 53) 国土地理院の標高データに拠る
- 54) 東京都台東区役所編 前掲書 41.
- 55) 東京都台東区役所編 前掲書 41.
- 56) 西まさる『吉原はこうしてつくられた』, 新葉館出版, 2018.
- 57) 西まさる 前掲書 56.
- 58) 塩見鮮一郎 前掲書 47.
- 59) 渡辺信一郎『江戸のおトイレ』, 新潮社, 2002.